

騙し合う人たち

—ナミビア、ナマのお金を巡る人間関係—

藤 田 翔*

2019年1月21日の夕方、お風呂を借りようと滞在先の家の母屋に入った私は、中にいたMから「後でオフィスに来て」と突然言われた。私はこの時ナミビア南部ハーダップ州のアサブ(Asab)という小さな村の、知人に紹介された家に滞在していた。その家には老夫婦と、その子どもであるM(40代の女性)と30代の男性が暮らしていた。Mは、この家で家事や家畜の管理等を取り仕切っていた。また、彼女は食料品等を販売する小さな店ももっていた。私はその店の商品をつけていくつか買っていたため、その支払いをしに、後で彼女の店に行けばいいのかと聞いてみると、「何? ああ、それじゃない」と彼女は否定した。その時は追及してもそれ以上話してくれなかった。つけの清算以外に私に思い付く事は無く、また、彼女はこのような曖昧な形で私に要件を伝えてきた事はそれまで無かった。そもそも、この家に「オフィス」と呼ばれている場所など無いのだ。

お風呂に入った後、彼女が忙しく母屋を出入りしている様子を見て、どこに行けばよいのかもわからない私は、母屋の隣に張っていた自分のテント近くの長椅子に座りながら、彼女に呼ばれるまで独り赤ワインを飲んで待っていた。すると、普段私が寝る準備を始める22時近くになってやっとMが私を呼びに来た。「ミーティングをしよう、『オフィス』で」と、彼女は言った。彼女のシリアスさを装ったような様子と、その冗談めかした言葉選びが可笑しくて、私は笑いながら彼女の後をついて母屋の中に入って行った。

母屋のリビングのソファに座りながら彼女が私に話したのは、簡単に言うと「300ナミビアドル¹⁾を貸してほしい」というものだった。この民族集団ナマの共住地域²⁾では、お金の貸借やねだりは日常的に行なわれている。外国人はお金をもっていると考えられているためか、調査地で私も頻繁にお金をねだられていた。しかし、この地域では珍しく、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) ナミビアの通貨。1ナミビアドル=約8円。

2) ナミビア南部カラス州とハーダップ州の一部にある、ナマ語話者が多く住む地域。1990年、ナミビアが南アフリカから独立した際、アパルトヘイト期に区分された民族集団ナマの地域(ナマランド)をほぼ踏襲する形で設定された。この地域は貧困率と非就業率が高い。

それまで私にほとんどお金を求めてこなかった彼女のこの時の申し出は、いくらか複雑な事情によるものだったとその理由を聞いてみてわかった。

M がお金を借りた経緯

M は以前から、2019 年に小学校へ通い始める娘の制服代や学校までの交通費など、娘の進学に伴う費用の工面に気を揉んでいた。彼女が幼馴染の友人男性 A に娘の進学費用の工面に悩んでいる事を伝え、友人 A は「わかった、助けよう」と言い、その援助を申し出た。その時、お金を工面する方法として、彼は売り上げの良いお酒を彼女の店で新たに販売するよう提案してきたという。

実際に、2018 年 11 月から M は自らの店でお酒を販売するようになっていた。自動車所有している友人 A が、村から 100 km 以上離れた都市部で缶ビール等を数ケース安く仕入れ、M の家へ運んでいた。同年の 10 月末からこの家に滞在していた私は、友人 A が銀色のトヨタハイラックスに乗って月に 1、2 回 M のもとを訪ねてくるのを見ていた。M の話では、友人 A が 2018 年 12 月と 2019 年 1 月の月初めに訪ねて来た時、彼はそれぞれ先月分の売上金の確認とその回収をしていた。しかし、その 2 回とも彼は売上金を総取りし、M への分配をしなかったという。売上金の分配割合について 2 人が最初どのように協議していたのかは不明だが、彼女は、実際に販売の仕事をしているのは彼女であり、最低でも売上金の約 1 割に当たる 800~1,000 ナミビアドルは月々与えられ

るべきだと考えていた。

売上金を分配しない事について、M は彼にその不満を伝えていた。12 月、彼女の不満に対して彼は、「妻が遠出をしていて、彼女に仕送りをしなければならないから今はお金がない。妻が帰って来たらお金を払う」と答えたという。しかし、実際に彼の妻が帰って来ても彼は「お金がない」と言い続け、M にお金を渡さなかった。また、M は直接的なお金の分配ではなく「せめて店で売分分のグロサリーを買ってきて欲しい」とも彼に頼んでいた。それに対して彼は、1 月半ばに家畜のオークションがあり、そこで彼の家畜が高く売れたら買うと答えた。しかし、オークションが終わると「売値が低くて求めている物は買えなかった」と話し、この彼女の要望にも応えなかったという。

「友人 A が M の金策を支援する」という形で始まったお酒の販売で、11 月分、12 月分と売り上げが友人 A によって総取りされ、自らの要望も聞き入れられなかった M は、彼から分配されるのを待つのではなく、彼を騙し、自分で売り上げの一部を得る事を考えるようになったという。彼女は 2 月の初めに 1 月分の売上金の確認・回収に来た彼に、実際よりも少ない嘘の売り上げを報告し、その差額を自ら得る計画を立てていた。

M の計画と実際に起きた事

私がつけて食料品を M から買っていたように、この地域では、人々が必要な時に十分なお金をもっていない事が多く、年金や給料が入ったら支払うという約束のもと、村の小

さな商店でのつけによる食料品の購入や、個人間で分割払いや後払いによる家畜の購入がしばしば行なわれているようだった。Mは、このつけで販売した分のお酒の売り上げを友人Aに隠して、後で支払われるお金を自ら得ようとしていた。そしてそのために、彼女は1月に入ってから何度か「今月は売れ行きが悪い」と友人Aに嘘を伝えていた。また、2月に彼がお酒の残量を確認する時に備えて、彼以外の人物に、つけで販売した分のお酒の新たな購入と、家までの運搬を依頼していた。

彼女はその計画の中で2人の人物のつけの清算をあてにしていた。ひとり目は彼女の友人女性Bで、もうひとりとは隣村出身の男性Cであった。友人Bは以前にも何度かつけで商品を購入した事があったようで、Mは彼女が月末に給料を得て、これまで必ずつけを清算してきた事を知っていた。そのため、彼女は友人Bによる今月分の支払いを確信していた。しかし、男性Cについてはいささか複雑な状況があり、つけが支払われるかどうかが不明であった。そして実際、支払われる約束の日に清算される事はなかった。

その日というのが、彼女が私にお金を借りた日であり、また、つけで販売していた分のお酒を購入しに行く人物が彼女の家を訪れ、その費用を受け取りに来る日であった。Mはその人物に支払う代金の一部を、男性Cのつけの清算によって得られるお金で賄おうと考えていたため、清算されなかった事による不足分を私から借りる事になったのだという。

男性Cのつけとその後の経過

Mの計画の中に私が登場するきっかけを作った男性Cのつけに関しては、Mと友人Aとのやり取りとはまた別の出来事がその背景に存在していた。Mの話では、男性Cのつけは、彼から1頭のヤギを代金後払いで購入していたMのおじが肩代わりしており、そのおじから支払われる約束となっていた。しかしそのヤギは、以下のような事情があり、おじが清算を約束した日の前日に、警察によっておじから没収されてしまったのだという。

Mが彼女の弟、隣に住むいとこ、そして幼馴染の警察官から聞いた話によると、男性Cはある日、どこからか「8頭のロバ」を連れてこの村にやって来た。それらのロバの耳にはタグが付いておらず、所有者が不明であった。男性Cは隣村では家畜泥棒をする男として有名であり、その「8頭のロバ」は彼がどこかで盗んで来たものであろうとの事であった。しかし、男性Cはその内の2頭をMのいとこの家へと連れていき、そこでいとこの家のタグを付けた出処の明らかな2頭のヤギと交換した。そして、Mのおじはそのヤギの内の1頭を男性Cから買っていたのだった。

2019年の2月になり、Mは私が貸したお金を、私のつけの帳消しという形で返済してくれた。そして、彼女は1月分の売り上げの確認に来た友人Aを無事に騙す事が出来たようだった。しかし、その時も不満を伝えた彼女に、友人Aは200ナミビアドルという彼女にとって期待外れの少額を渡して帰っ

たという。さらに、おじが肩代わりした「男性 C のつけ」は、未だ M へ支払われていなかった。

おわりに

これまで、私が M からお金を求められた出来事をきっかけに、その経緯とその後の経過について彼女から聞いた話を記述してきた。その話の中で人々はお互いを騙し合っていたように見える。この地域で生活する中で、私も「騙された」と思うような経験を何度もしてきた。仲良くなったと思った相手が、お金を得ようと嘘を吐いていたと知ると、私はどうしても相手を信頼できなくなり、警戒心からそれまでのように親密には接

する事が出来なくなってしまう。しかし、M は彼女を騙した友人 A について、「これからも友だちである事に変わりはない」とはっきり言い切っていた。さらに、彼との関係を維持しつつ状況を変えるために非常に苦心して計画を練ったと彼女は話していたが、その結果、彼を騙す事を選択していた。彼女のこうした発言や行為は、彼女の中で「騙す（される）事」と「親密性」が共存しうる事を示しているようで、私にとっては驚きであった。ここでみられるような、騙し合いつつ親密性を維持するという関係のあり方について、今後の研究でより深く理解出来れば良いと思っている。

炭を食べるサル

—ザンジバルアカコロブスの採食行動—

野 田 健太郎 *

炭を食べるサル

東アフリカ、タンザニアのザンジバル諸島に生息する霊長類ザンジバルアカコロブス (*Procolobus kirkii*) は、炭を食べる行動が頻繁に観察されている [Struhsaker *et al.* 1997] (写真 1)。

ゾウなどの野生動物が土を食べる行動はこれまでにもたびたび報告されてきた。また他の動物でたまたま炭を口にしたというケースはあったとしても、日常的に炭を採食するという動物は世界を見てもあまり知られていない。

ザンジバルアカコロブスはザンジバル諸島

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 炭を食べるコロブス

だけに生息している。近年、森林の減少にもなっており個体数が減ったことで、IUCN（国際自然保護連合）は1994年に絶滅危惧種IB類に指定した。2004年にはザンジバルアカコロブスの保護と、海洋生物を含む海浜環境の保全を目的としてジョザニ・チュワカ湾国立公園が設置された。ザンジバルアカコロブスは全生息数約5,600頭と推定されていて、その半数あまりが面積約50 km²の小さな国立公園とその周辺に生息している。

炭は人間の産物であるが、国立公園内に民家はなく、炭食行動は国立公園の外で観察されている。コロブスは国立公園に隣接する農村に現れて、民家の庭先や軒先にある調理場の消し炭を拾って食べているのである。炭は炭素の単体なので、それ自体を消化吸收することはできない。ミネラルが欲しいのであれば、調理場に貯まった灰を食べればよいのだが、それには見向きもしない。わざわざ危険を冒して民家に近づき、栄養価のない炭を食べるには、何かよほどの事情があるにちがいない。

他の動物の炭食い

動物が炭を食べないものであるから、その効果について調べた研究もほとんどない。ようやく見つけたわずかな論文のうち2つは、いずれも飼育下のヤギとヒツジに対して行なわれた実験である。ひとつは、消化阻害物質であるテルペンを多く含むキク科ヨモギ属（*Artemisia tridentata*）の茎葉に活性炭を混ぜてヤギとヒツジに与えた試験で [Villalba *et al.* 2002]、2つ目は同じくテルペンを多く含むヒノキ科ビャクシン属の植物（*Juniperus phoenicea*）の葉に活性炭を加えてヤギとヒツジに与えたときの試験である [Rogosic *et al.* 2006]。前者では活性炭を与えることによる有意な効果は認められなかったが、後者では活性炭を混ぜることで、消化阻害物質を含む飼料もよく食べるようになったという結果を示している。

一方、人間の救急医療の現場では、応急処置に活性炭を用いることがある。たとえば、マラリアの特効薬キニーネに対して中毒症状を示した患者に活性炭を飲ませて中毒を緩和させることがある。誤って毒物を飲んでしまったときも、その直後であれば患者に活性炭を服用させ、炭に有害物質を吸着させることで体内への吸収を抑えるという応急処置も紹介されている [Gaudreault 2005]。

植物の葉や未熟果には、動物にとって有害な生理作用をもつ二次代謝産物が含まれている。二次代謝産物には、吸収阻害を起こすタンニンなどのポリフェノール化合物、アルカロイドやシアン化グリコシド（青酸配糖体）のような毒性化合物などがあるが、コロブス

の胃はウシのように複数に分かれ、そこに棲むバクテリアの作用によって植物の二次代謝産物を分解あるいは無毒化することで、葉食が可能になっていると考えられている [中務・國松 2012].

このような先行研究を背景に、ザンジバルアカコロブスの炭食い行動を初めて報告した論文は、コロブスは体内で炭にタンニンを吸着させているという仮説を唱えた [Cooney and Struhsaker 1997] が、裏付けるような科学的な根拠は充分に示されていない。調査当時、ザンジバルアカコロブスたちは群れで集落に現れ、家屋の周辺に植えられたマンゴー (*Mangifera indica*) とモモタマナ (*Terminalia catappa*) の葉を頻繁に採食していた。これらの葉には多くのタンニンが含まれていることから、炭食い行動はザンジバルアカコロブスが人為的な環境で生存するために培った適応行動だと Cooney ら [1997] は説明している。

腸内細菌との関係

2000 年以降、DNA の解析技術が進歩したことで腸内細菌に関する研究はにわかに脚光を浴びるようになった。腸内細菌は生物の消化器官に棲み、宿主の消化酵素だけでは分解できない有機物を分解して消化作用を助けるはたらきをしている。人間を対象とした研究では、腸内細菌が消化作用のみならず、食欲や精神状態、免疫系統にも大きな影響をもたらすことが指摘され、“もうひとつの臓器”と呼ばれて注目されている [Weinstock 2012]。そうした波は、霊長類学の分野にも

及んでいる。

タンザニア大陸部のウズングワ山塊国立公園には、ザンジバルアカコロブスの近縁種とされるウズングワアカコロブス (*Procolobus gordonorum*) が生息している。このコロブスの調査では、集落に出没する群れと自然林に生息する群れの糞をそれぞれ採取し、腸内細菌の構成を比較している。それによると、自然林に生息する群れは、集落に出没する群れよりも多様な腸内細菌と共生していて、それは食物の多様性と関係している [Barelli *et al.* 2015].

また、Amato ら [2016] は、同じコロブス亜科のアビシニアコロブス (*Colobus guereza*) が飼育下において偏った食物品目を採食すると、たびたび下痢をすることに注目し、下痢症状を示した個体の糞と正常な個体の糞の腸内細菌叢を分析・比較した。その結果下痢症状の個体では腸内細菌が貧素化していることが分かった。こうした研究結果は多様な食物品目によってコロブスの腸内細菌が多様化し、多様な細菌叢がコロブスの健康状態を保つのに重要な役割を果たしていることを示唆している。

そして、コロブスの研究ではないが、ブタに竹炭を与えた試験では、腸内細菌の種数が増えたうえ、消化不良の際に発生しやすい糞中のメタンガスが減少したという報告もある [Chu *et al.* 2013]。そのメカニズムはまだ不明だが、炭がブタの腸内細菌叢に何らかの影響を与えていると考えられる。

フィールドワークへ

2018 年、私はザンジバルアカコロブスの行動を仔細に調べるためにひとつの群れの追跡調査を行なうことにした。

30 頭からなる A 群を日の出から日の入りまで追い、5 分ごとにサルたちの行動を記録した。どの樹木の何を食べているのか、どこを移動し、どういう場所で休息し、どこで寝ているのかなど、行動のすべてを記録していった。国立公園の南東部を行動域にしているこの群れは、3~4 日ごとに公園の外に出て、集落の近くの森で夜間寝ていることが分かった。そして、そのような日にかぎって、人家の調理場で炭を食べている姿が観察されたのである。

樹上での移動が多いコロブスだが、人家の庭先の調理場に消し炭を見つけると、1 頭ずつ地面に下り、炭を拾ってガリガリとかじり出す。メスが食べる光景をよく見かけたが、

オスも食べる。時には群れのメンバー同士で奪い合いながら、熱心に炭を食べる。群れが通り過ぎたあと私も、炭をかじってみたが何の味もしなかった。

2 カ月の調査を終え、採食対象となる植物をまとめ、1999 年に実施された先行研究 [Siex 2003] のデータと比較したところ、主要な樹種が大きく入れ替わっていることが分かった (図 1)。

1999 年に調査された群れは、2018 年の A 群とほぼ同じ範囲を行動域にしながら、モモタマナ、ココヤシ、マンゴーなどの葉や花序を食べていた。ところが、2018 年の私の調査では、それらの採食頻度は大幅に減少し、代わってグアバ (*Psidium guajava*) の葉や未熟果、フトモモ科の果樹の葉などが主要な食物になっていた。国立公園が設置され集落が公園外に移ってから、この群れは相変わらず集落へ出沒し、人間が植えた樹木を主要

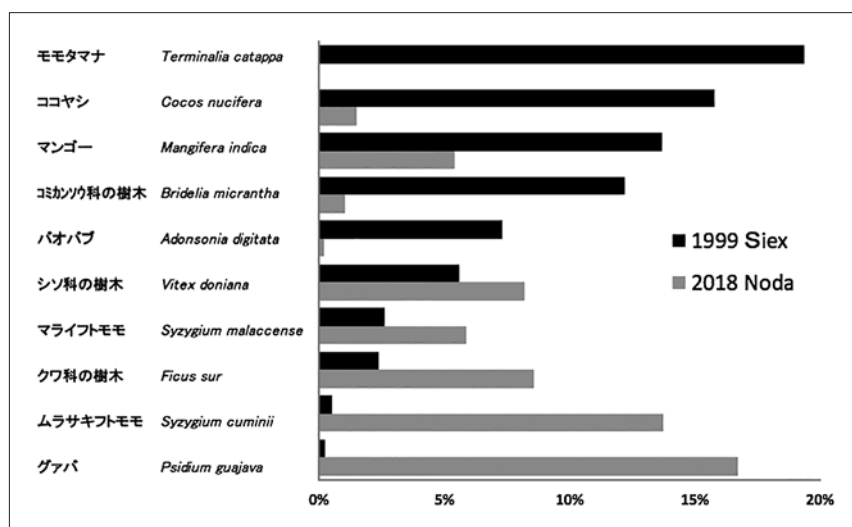


図 1 1999 年と 2018 年における樹種ごとの採食頻度 (全採食時間に占める各樹種の採食時間)

な食物としていたのである。それらが自然林を食物源にするよりも、食物品目数は少なく単調なのは明らかである。文献からの情報と合わせれば、観察した A 群は消化不良を起こしやすい環境に生息し、そのことが炭食い行動と関係している可能性が高い。

炭食い行動によって、実際コロブスの体内でどのような化学反応や腸内細菌叢の変化が起きているのかを知るのは難しい。今後は生態調査に加え、住民から聞き取りも行ない、炭食い行動と集落進出との関連性やその起源を探る。その中に住民とコロブスが限りある森林環境をいかに共有してきたかヒントが隠されているにちがいない。

引用文献

- Amato, K., J. Metcalf, S. Song, V. Hale, J. Clayton, G. Ackermann, G. Humphrey, K. Niu, D. Cui, H. Zhao, M. Schrensel, C. Tan, R. Knight and J. Braun. 2016. Using the Gut Microbiota as Novel Tool for Examining Colobine Primate GI Health, *Global Ecology and Conservation* 7: 225–237.
- Barelli, C., D. Albanese, C. Donati, M. Pindo, C. Dallago, F. Rovero, D. Cavalieri, K. Tuohy, H. Hauffe and C. Fillippo. 2015. Habitat Fragmentation is Associated to Gut Microbiota Diversity of an Endangered Primate: Implication for Conservation, *Scientific Reports* 5: 1–12.
- Chu, G., J. Kim, H. Kim, J. Ha, M. Jung, Y. Song, J. Cho, S. Lee, R. Ibrahim, S. Lee and Y. Song. 2013. Effect of Bamboo Charcoal on the Growth Performance, Blood Characteristics, Noxious Gas Emission in Fattening Pigs, *Journal of Applied Animal Research* 41: 48–55.
- Cooney, D. and T. Struhsaker. 1997. Absorptive Capacity of Charcoal Eaten by Zanzibar Red Colobus Monkeys: Implications for Reducing Dietary Toxins, *International Journal of Primatology* 18: 235–246.
- Gaudreault, P. 2005. Activated Charcoal Revisited, *Clinical Pediatric Emergency Medicine* 6: 76–80.
- 中務真人・國松 豊. 2012. 「アフリカの中新世界ザルの進化—現生ヒト上科進化への影響」 *Anthropological Science (Japanese Series)* 120(2): 99–119.
- Rogoscic, J., J. Pfister, F. Provenza and D. Grbesa. 2006. The Effect of Activated Charcoal and Number of Species Offered on Intake of Mediterranean Shrubs by Sheep and Goats, *Applied Animal Behaviour Science* 101: 305–317.
- Siex, K. 2003. Effects of Population Compression on the Demography, Ecology, and Behavior of the Zanzibar Red Colobus Monkey (*Procolobus kirkii*). Ph.D. Dissertation, Duke University, Durham, NC.
- Struhsaker, T., D. Cooney and K. Siex. 1997. Charcoal Consumption by Zanzibar Red Colobus Monkeys: Its Function and Its Ecological and Demographic Consequences, *International Journal of Primatology* 18: 61–72.
- Villalba, J., F. Provenza and R. Banner. 2002. Influence of Macronutrients and Activated Charcoal on Intake of Sagebush by Sheep and Goats, *American Society of Animal Science* 80: 2099–2109.
- Weinstock, G. 2012. Genomic Approaches to Studying the Human Microbiota, *Nature* 489: 250–256.

学生運動とインド民主主義

向 田 公 輝 *

筆者は、インド外交、とりわけ最初のインド人民党（Bharatiya Janata Party：以下、BJP）政権であるヴァージペーイー政権期（1998年3月～2004年5月）を研究テーマに、2019年8月1日～9月30日にかけて、インド・ニューデリーにおいてフィールドワークを行なった。その際、インドの名門国立大学として知られるジャワーハルラル・ネルー大学（Jawaharlal Nehru University：以下、JNU）に滞在し、同世代のインド人学生たちと多くの時間を過ごした。

インドの学生は、友人同士で政治議論をすることが当たり前であり、自分が雑談の輪に加わっている時でも、積極的に自分の政治的意見を話すことが歓迎され、また求められた。とりわけ、日本人の研究者はモーディー首相の貧困政策や外交政策、宗教対立、カースト問題についてどのように考えているかということが彼らの主な関心であったようである。さらに、インドでは、国政政党などの学生組織に参加する学生の数が日本と比較して圧倒的に多いと感じた。

JNU内には、現在のBJP政権を支える民族義勇団（Rashtriya Swayam Sevak Sangh：以下、RSS）に所属する学生団体である全インド学生会議（Akhil Bharatiya Vidyarthi

Parishad：以下、ABVP）、現在の野党で、かつてインド政治を支配していたインド国民会議派系の学生団体である全インド学生連盟（National Student Union of India：以下、NSUI）、科学的社会主義を重視する全インド学生連合（All India Students Federation：以下、AISF）、ビルサ・アンベードカル・プーレ学生協会（Birsa Ambedkar Phule Students Association：以下、BAPSA）、マルクス主義の学生団体であるインド学生連合（Students Federation of India：以下、SFI）、マルクス・レーニン派の全インド学生協会（All India Students Association：以下、AISA）といった多くの学生組織が存在していた。とりわけ、JNUやデリー大学のABVPやNSUIで幹部を務めた学生のなかには、将来、BJPやインド国民会議派の国会議員候補や州議会候補として擁立される者も多かった。

学生との交流

私はJNUの学生寮に滞在し、インド人のルームメイト3～4人と2ヵ月間共同生活を行なった。ルームメイトの2人は、BAPSAの活動家で、1人はインド国民会議派の活動家であった。

BAPSAとは、かつての不可触民であるダ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

リトや主に山岳地帯に居住する部族民など、これまで虐げられてきた人々のために政治を実行することを主張する学生組織である。彼らは、ダリト解放運動の指導者であり、初代法務大臣としてインド憲法の起草者となったアンベードカルの息子を名乗り、アンベードカルは、M.K. ガーンディーの指導したハリジャン（「神の子」の意、不可触民解放運動を展開するなかで、ガーンディーが使用した呼称）解放運動を厳しく批判し、対立していたため、BAPSA の人々はガーンディーをカースト秩序の維持を図った人物として批判的であった。私は、今までガーンディーに対する肯定的な評価になじんできたため、「インド独立の父」としてのガーンディーの功績を批判する人々との交流は新鮮であった。

政党の活動

ルームメイトのひとりとは、10月21日に行なわれたハリヤーナー州議会選挙の運動員として活動し、選挙が間近に迫った9月以降、早朝ニューデリー中心部の会議派本部へ行き、選挙運動の手伝いをする生活を行っていた。私も、インド政治を学ぶ貴重な機会だと考え、数回ほど会議派本部へ連れて行ってもらったが、ラフル・ガーンディー、ソニア・ガーンディー、などのガーンディー家一族、2004年から14年まで10年間首相を務めたマンモハン・シンの写真が並んだ大きな選挙ポスターが入りに掲げられ、質素な建物のなかに、多くの候補者や党員が詰めかけていた。



写真1 インド国民会議派本部にて、ハリヤーナー州議会選挙運動のために集まる立候補者や運動員の人々

私は、彼に選挙応援を毎日行なう理由を尋ねると、「俺は将来、会議派から立候補して議員になって、ダリトや貧困層のための政治をしたいんだ」と言っていた。会場には、私と同世代の若い党員も多く参加していた。

学生自治会選挙

インドの大学では毎年9月頃に学生自治会の役職を巡って選挙が行なわれ、JNUにおいても9月上旬に自治会長、副会長、書記長等の選挙が行なわれた。学生自治会選挙期間中は、JNU内の各学生組織が候補者を出し大学内のさまざまな場所で選挙集会や演説が行なわれた。2019年の自治会長選挙では、ABVPに対抗する形で、AISA, SFI, AISFといった左派団体が中心となって「Left Unity」を結成し、NSUIやBAPSAも部分的に独自候補の擁立を取り下げることで「Left Unity」との共闘姿勢を示した。反ABVP系の選挙集会は共同で行なわれ、Facebook等のSNSも存分に活用して選挙戦を展開し



写真2 JNU内の広場にて、「Left Unity」が主催した選挙集会

た。その結果、デリー大学などの他大学の学生自治選挙ではABVPが勝利しているなかで、JNU学生自治選挙では「Left Unity」がABVPを破り勝利した。

学生自治会選挙では、学生寮の設備改善等の学生自治に関わる問題以上に、モーディー政権の政策の是非など国政問題が大きな争点となった。私も、キャンパス内で各学生団体主催の集会や学生同士のディベートの場に参加し、国際政治やインド政治を研究する学生や政治家を志望する学生とカシミール問題、国内政策、外交政策に関する議論を深めることができた。

カシミールの自治権撤廃

とりわけ、8月5日にジャンムー・カシミール州に対して特別の自治を認めてきたインド憲法370条が撤廃され、カシミールを新たに2つの連邦直轄州に分割する大統領令が發布されたこともあり、カシミール問題が学生選挙の重要な争点となった。インドの外交政策にとっても重要な意味をもつカシミール情勢が大きく動く様子を学生との議論や報道を通して観察することができた。

ABVPの学生たちは、8月6日には憲法370条撤廃を祝福するピラを校舎で配っていた。彼らは憲法370条撤廃を「長く待たれた歴史的瞬間」であり「ジャンムー・カシミールは反インドを信条とする独裁政治から解放された」と表現した。続けて、憲法370条撤廃によって「カシミール住民を政治エリートや分離主義者、イスラーム聖者たちから解放する」と表現し、「パキスタン側カシミールからの越境攻撃への対策、インフラ開発が遅れている地域への中央政府による投資の拡大を可能にする」と主張した。

他方で、左派組織も、憲法370条の廃止とその後の混乱を「人権侵害」や「ジェノサイド」という言葉を用いて厳しく批判し、カシミールの人々との共闘を唱えた。たとえば、NSUIは、憲法370条撤廃が宣言される前後の時期のカシミールにおいて、インド軍の大幅増員が行なわれ、カシミール人政治家の自宅軟禁やインターネットの停止が行なわれた点などを問題視し、「民主主義と連邦主義の撲殺」と表現した。左派組織間では、カシミールや国内政治をめぐる諸問題での反ABVPの姿勢では一致しており、全候補が合同で行

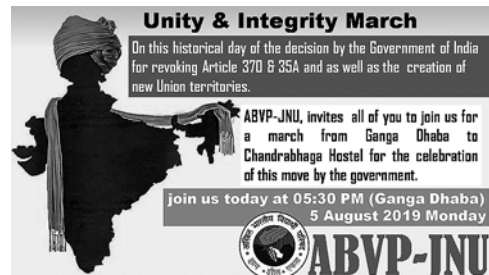


写真3 憲法370条撤廃を記念して、SNSでデモ行進を呼びかけるABVP

なった討論会でも、ABVP の候補対「Left Unity」の図式のディベートとなっていた。

インド民主主義と学生運動

インドの学生たちは多くが学生組織に参加し、学生自治会選挙を通して学生同士の政策論争を行なうとともに、時には州議会選挙などで国政政党にも活動員として加わることで、民主主義へ主体的に関わろうと努めているように感じた。また、大学内や警察署前等でデモや集会を行なうなど、直接的な要求という形で民主主義に参加しようとする動きもみることができた。インドでは多様な主義主張の学生団体が運動を動員し、選挙を通じた間接民主主義やデモ、集会を通じた直接要求運動が展開されている事が特徴的である。

また、インドの経済発展に合わせて、学生運動の形も変わってきているように思われる。現在の学生運動では、SNS を通じて、学生たちは情報の収集や自身の主義主張の発信を行ない、学生団体は政策の宣伝や演説の動画を拡散することで学生メンバーの拡大を図り、デモ行進や集会の呼びかけを行なうことで動員を行なっている。とりわけ、庶民向けの安価なスマートフォンが幅広く普及したことにより、ABVP 支持の学生、NSUI 支持の学生、ダリト学生、共産党支持の学生関係なく、多くのインドの学生が SNS を通じて政治的意見の発信を行なうことが可能となった。JNU 学生自治選挙では、多くの学生団体とその運動員たちが、候補者の顔写真や演説、集会の画像や動画を毎日のように拡散するとともに、ともすれば、それ以上に、相手

の陣営への批判も展開していた。

国政政党も学生組織に力を入れており、RSS の支援によりインド一の組織力をもつ学生組織となった ABVP に対して、NSUI もソニア・ガーンディー総裁の息子であるラフル・ガーンディーによって組織の拡大が行なわれた。ABVP や NSUI は、JNU のあるデリーだけでなくインドのほぼ全域の主要都市に活動拠点が存在し、組織的な運動の動員が行なわれており、とりわけ、ABVP はデリー大学など他大学の学生自治選挙では勝利を収めている。他方で、JNU においては、ABVP や NSUI に比べて組織の動員力で劣る AISE、SFI、AISA、BAPSA といった学生組織も、SNS を積極的に利用し、時には「Left Unity」のような連立組織を結成することで、ABVP に対抗する影響力を示しているのが特徴的である。

インドの学生運動は、多様な主義主張の学生団体が運動を動員し、自分たちの政治的要求を大学自治レベルだけでなく、国政レベルにまで届けようとしていることが特徴的であるといえる。これこそまさにインド民主主義を支える重要な柱のひとつであり、彼らの活動こそ、民主主義の可能性を示すものと評価できよう。

これからの研究では、カシミール問題における与野党の議論の歴史を丁寧に整理したうえで、ヴァージペーイー政権が与野党の政治家や支持者からどのように評価されていたかという点にも着目し、ヴァージペーイー政権期インドの外交政策がどのように展開されたかを明らかにしていきたいと考える。

美人コンテストの舞台裏と「ミス」たちのその後

依 田 ひかり *

華やかなフィナーレを迎えるために、美人コンテストに参加する女性たちは何と向き合うのだろうか。また、彼女たちは「ミス」になってどのような人生を歩むのか。筆者が2019年8月から10月までジャカルタ特別州で行なった聞き取り調査を元に、インドネシアの美人コンテストについて報告する。

インドネシアの美人コンテスト

昨今インドネシアでは、美人コンテストへの関心が高まっている。スハルト政権期には、商業や観光促進の目的として開催を許されたプトゥリ・インドネシアを除いて、美人コンテストの開催は法的に禁止されていたが、その後民主化を経て自由化されると、毎年開催される大規模な国内大会や、その優勝者の国際大会における順位に高い関心が寄せられるようになった [Fajarini 2014: 489–490]。インドネシアは2005年以降本格的に国際大会へ参加するようになったが、1950年代から継続的に国際大会へ出場してきたフィリピンとタイに続いて21人の入賞者と1人の優勝者を輩出しており、東南アジア地域で頭角を現している。¹⁾ 主要大会は毎年テレビで放送され、観光業界やファッション・美容産業界

からの支援も手厚い (写真1)。

また、スハルト政権期における美人コンテストは、非公開で審査員も明らかでない場合が多かったが、近年インターネットの普及やSNSの流行によって国内外のコンテスト情報が活発に共有されるようになっただけでなく、主要大会ではインターネット投票による人気賞の枠を設けるようになり、出場者もSNSを通して積極的に観衆とコミュニケーションを図るようになるなどその様式も変化した。このように短期間で大きな変化を迎え、現在活況を呈するインドネシアの美人コンテストでは何が問われ、女性たちは何を得的のだろうか。



写真1 滞在先のテレビで放送されていたミス・グランド・インドネシアの決勝戦

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) フィリピンは91人の入賞者 (内優勝者15人)、タイは49人の入賞者 (内優勝者3人)。

美人コンテストの評価基準

各主要大会の応募条件は、17 歳から 25 歳の未婚女性、身長は 165 センチメートル以上で一般教養をもつインドネシア国民であることが共通点として挙げられるが、具体的な審査基準は書かれていない。

2006 年に情報共有サイト「インドネシア・ページェント・ドットコム」を逸早く開設し、美人コンテストでの審査員経験もあるムキエ・ダラドジャ氏に候補者たちの外見的特徴について話をうかがった。同氏によると、最も重要なパーツは 2 つある。ひとつ目は、肌である。なぜなら、メイクで顔の雰囲気や造形をいじることではできても、肌の質感を変えることはできないため、最終選考のテレビ放送で美しさの審査に決定的な影響を与えるからだ。「清潔で、なめらかな肌」が良いようで、意外にも白さは重要でない。むしろ、ミス・ワールドやミス・ユニバースでは、アジア人らしい褐色肌が好まれる。2 つ目は、歯である。歯の審美的重要性は世界共通である一方、美しく整えるまでに時間を要するため、勝てる候補生は既に美しい歯をもっているという。

美人コンテスト出場経験者へのインタビューで外見について聞いてみると、重要なパーツとして肌、歯、身長が同様に挙げられた。しかし、そもそも美人コンテストで外見的魅力は重要ではなく、内面の美の準備に多くの時間を割くという意見が圧倒的に多かった。実際、世界四大会では、フェミニズムから批判された外見の序列化を避けることや、人々の多様性を認めることを背景に、内

面の美が重要視されており、この影響が国内大会に出場する彼女たちにも及んでいる。

内面の美？

美人コンテスト出場者向けの著名なトレーニング事務所「ラトゥ・スジャガッド」の代表者 2 人によると、美人コンテストで測られる内面の美とは、パブリックスピーキングや質疑応答（一般教養）を通して測られる「知性」と「自信」だという。

主なレッスン内容は、パーソナル・ブランディング（自分の磨き上げ方に関するヒアリング）、キャットウォークとボーキングの練習、ステージでの所作の指導（美しい立ち方など）、メイクやスタイリングの指導、パブリックスピーキングの練習（英語や発声の練習）、そして質疑応答の練習である。どの大会に出場するかは、候補生の出場経歴や興味関心、学歴、性格に合わせて進めるが、レッスンは 2 週間で済む者もいれば約半年かかる者もいるという。代表のひとりであるトマ・ガルトム氏によると、「内面の美しさに磨きをかけるために、（その期間には）個人差がでる。（中略）特に、スピーチ慣れしていない生徒は泣き出すこともある」という。実際に同事務所やほかのトレーニング事務所も含めてレッスンに参加したことのある女性たちに話を聞いてみると、「ウォーキングよりも質疑応答やパブリックスピーキングの練習に多く時間をかけた」、「本当にきつかった」という声が多かった（写真 2）。

ほかにも、ミス・ワールドでは、社会貢献活動を行なうことで外見以外の美、内面の美



写真2 2019年プツリ・インドネシアのファイナリストたちと筆者

を審査する。世界最古の世界的美人コンテストでありながら、水着審査の廃止を率先して行ない、スローガンとして「目的のある美 (Beauty with a Purpose)」を掲げ、各国の地域予選から SDGs への取り組みを審査に入れるなど社会貢献の側面を強く出している。国内予選を勝ち抜いた代表者は、各国に存在する社会問題に取り組む様子を動画にしてユーチューブに掲載する。その動画で最も高い評価を得ると、ビューティー・ウィズ・ア・パーパス・アワードの勝者として最終予選に進むことができるのだ。

このビデオ制作に携わるオーガナイザーであるムハマド・アリフ・キルディアット氏にお話をうかがった。彼は、「いいビデオを作るうえでの鍵は、世界中の人々の心を動かすことだ」と語った。具体的には、山奥に住んでいて通学が困難な子どもたちのために橋を架けるプロジェクトや、貧村で安全な水を確保するためのプロジェクトなどである。これらのプロジェクトに、美しい若い女性が汗水たらして参加することで、彼の言葉を借りる

と「ジャーナリズム・アイル・マタ (涙のジャーナリズム)」が完成する。ジャーナリズム・アイル・マタとは、国や地域を問わず観衆皆が心打たれるお涙頂戴要素の詰まった報道を指すそうだ。

感動的なプロジェクトは、美人コンテストの大義的な開催目的である平和や親善の達成のために適当な審査方法だが、これで内面の美や知性を測れるかは疑問である。外見的美だけでなく個々の多様な在り方を認めるために内面の美が重要視されてきたが、不可視で画一化することのできない内面の美こそ本来多様性に富んでいることを考慮すると、個人の内面を課題や規準に沿って順位をつけることは、外見を判断して序列化することよりも残酷に感じられる。また、自信の有無についても結局、ミスたちの話し方やウォーキングなどの振る舞いといった視覚的情報から審査員が主観的に判断するほかない。その意味では、内面の美を測るために外見の美が決定的に重要である。

フィナーレの後に

他方で、美人コンテストに出場した女性が、外見的评价のみを受けて皆女優やモデルになるというわけではない。美人コンテストで個人の実力が認められ、大会出場経験を糧にその後の人生を歩む「ミス」たちに今回の調査で多く出会った。

そのうちのひとりが、マリア・ハルファンティ氏 (27歳/ジャカルタ出身) である。彼女は、2015年にミス・インドネシアに出場した。出場動機については、「昔から背が

高いから、周りの友達（自分に）コンテストに出るよう勧めたりすることがあって、（中略）（当時）大学４年生ですることもなく、時間を持て余してたから出てみた」と述べた。野心や明確な目標があって参加したわけではない彼女だったが、ミス・インドネシアに選ばれ、ミス・ワールドに出場し、世界３位の座に輝いた。ミス・インドネシア財団が優勝者に課す契約期間は５年間と長く、その間はミス・ワールドの広報活動やファッション雑誌の表紙を飾るなど華やかな世界に身をおいだ。同時に特筆すべきは、「Yayasan Bangun Sekolah（学校建設財団）」を個人で設立し、美人コンテストで知り合った企業から寄付を募って、老朽化が進む田舎の小学校を立て直したり、資材を寄付して教育環境を向上させたりするプロジェクトを実施していることだ。筆者もこのプロジェクトを見学させてもらった（写真３）。汗だくになりながら子どもたちと交流した後、真剣な顔でドナーに計画書の確認を行なう彼女は、より一層輝いているように見え、「これが世界３位の実力か…」と思わざるをえなかった。彼女は児童教育や栄養学に興味をもっており、ミス・インドネシアの契約が切れた後もこの活動をライフ・ワークにするそうだ。

美人コンテストについては、外見だけで社会的上昇を図れる手段のひとつとしてそれを利用する女性の事例や、その構造的問題を批判することに注目が集まりやすい。しかし実



写真３ 寄付先の小学校にて（右から３番目がハルファンティ氏）

際には、各美人コンテストが候補者に求める素質の中に内面の美や知性といった曖昧な概念（語学能力やバイタリティなど）が含まれる。さらにそこには一定の文化資本が必要なため、インドネシアの美人コンテストで成功することは有能な女性であるというステータスを獲得させ、個のキャリア形成の糧となることに意味があるだろう。また今回の調査では、美人コンテストに参加する女性たちが判断される対象としての枠組みを超えて、「ミス」としての人脈を活かしながら主体的に活動する姿を見ることができた。今後も、彼女たちを中心に、インドネシアで急成長する美人コンテストの社会的影響力について研究したい。

引用文献

- Fajarini Inda, A. 2014. Kontroversi Miss Indonesia Tahun 1982–1984, *e-Journal Pendidikan Sejarah* 2(3): 488–498.

大雨によって引き起こされた直接交渉

工 藤 太 地 *

2019年8月11日、フィールドワークを開始して初めて迎える日曜日の朝、NGOの事務所に併設されているゲストハウスに滞在していた私は、外の騒がしさに目を覚ました。毎週日曜日には、住民は仕事を休み、家でゆっくり休日を過ごすと思っていたのだが、その騒がしさから外で何かが起こっていることを察した。程なくして、部屋のドアの向こうから私を呼ぶ声が聞こえた。

「起きろ、タイチ！ペンと紙を貸してくれ！」

ドアを開けると、私のリサーチ・アシスタントを務めるS氏が立っていた。着替えて部屋を出ると、彼と同じ村の住人がNGOの事務所に集まっていた（写真1）。



写真1 朝からNGOの事務所に集まる村人

ニルギリの豪雨

この出来事は、インド南部タミル・ナードゥ州ニルギリ県で活動するあるNGOの事務所の敷地内で起きたことである。私は同県に在住するパニヤーンという社会集団の社会上昇の実践について研究しており、医療サービスや職業技能訓練、雇用創出活動などを通じてパニヤーンに対して支援活動を行なうNGOと協力して、調査を進めていた。この騒動は、2019年8月に発生したニルギリ県の豪雨災害に端を発していた。

調査を開始した8月の初旬のニルギリは、雨季のただなかで、連日大雨が続いていた。特に、今年の雨量は例年以上に多く、タミル・ナードゥ州の24時間あたりの降水量記録が、ニルギリ県のアヴァランチェ（Avalanche）という地点で76年ぶりに更新された[Skymetweather 2019]。州政府災害管理局は特別警報を発令し、災害救助チームが被災地に派遣される事態にまで進展した。地元メディアによれば、ニルギリ県では、死者が6人、避難者が1,500人以上にのぼり[The Indian Express 2019]、テレビの報道番組では、洪水や土砂崩れによって家族を失った者や避難キャンプでの生活を余儀なくさせられた住人の悲痛な姿が画面に映し出されていた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

パニヤーンの住居問題

私が研究対象とするパニヤーンも、豪雨の影響を受けた人々であり、それは特に住居に関することであった。パニヤーンは、州政府によって指定部族 (Scheduled Tribes) に指定されている。指定部族とは、文化的独自性、社会経済的後進性、隔絶度の高い居住の点から州政府によって認定されるコミュニティの総称であり、認定を受けた社会集団は、政府よりさまざまな支援やサービスを受けることができる。指定部族への政策のひとつとして、タミル・ナードゥ州では、政府が指定部族に対して住宅を提供している。それに加えて、調査地では NGO が住宅提供を行なう場合もみられた。

住居は、人々にとって重要な生活資源である。それでは、そうした住居提供の制度があるなかで、住居は実際に住民のもとへ行き渡っているのだろうか。フィールドワークを進めるうちに、村によって住居の分配に偏りがあることに気付いた。

パニヤーンの住宅状況は主に 3 つに分類され、(1) 過去に政府や NGO から提供された、雨風を十分に防ぐことができるコンクリート製の住居、(2) 過去に政府や NGO から提供されたが、その住居自体が経年劣化し、壁や屋根に欠損がみられ、雨風をしのぐには十分でない住居、(3) 住居提供を受けておらず、泥や草木、ビニールシートなどを使って自らが建てた住居、となる。

それでは、なぜ村によって住居の分配が偏ったのであろうか。村人への聞き取りで最もよく耳にしたのは、村の地理的な立地に関

する言及であった。住居が提供されていない村は、車が通過できる道路に面しておらず、また村まで歩道が整備されていないことが多かった。村人によれば、建築資材を搬入することができる道が整備されている村から優先的に住居提供を受けることができるため、道路が整備されていない村に住む自分たちはいつも後回しにされるのだという。仮に住居が提供されたとしても、決して質が良いものとはいえず、10 年ほど住むと、壁や屋根の欠損が多く生じるという。上記の分類で (2) や (3) にあたる住居に暮らす者たちは、行政の末端組織である村民総会 (Gram Sabha) に出席し、住居提供やその再建を何度も要求しているようだったが、それによって状況が改善するには至っていないようだった。

こうした雨風を十分にしのぐことができない家に住む人々こそ、連日の豪雨で生活が脅かされたのだった。

怒りの限界に達した村人、直接交渉へ

では冒頭のエピソードに戻るとしよう。私のリサーチ・アシスタントである S 氏が私の部屋を訪ねたのは、連日の大雨とはうって変わって、久しぶりに青空が見えた日曜日の朝であった。朝から村人たちが NGO の事務所に押しかけている理由を S 氏に尋ねると、

「連日の大雨でみんな我慢の限界なんだ。家の建て替えを求めて、みんなで抗議することにしたよ。」

と返答された。彼と同じ村の人々は、上記の分類では (2) に該当する住居をもつ者が多く、連日の大雨によって、屋内まで浸水した



写真2 大雨によって倒壊したパニヤーンの家

者や、家そのものが倒壊した者まで出ている。

これまで NGO や行政職員に何度も家の建て替えを求めてきたが、その場では対処するという口約束が結ばれるだけで、実際の建て替えは全く進んでいなかったという。こうした事情のなか、連日の大雨によって住居問題が顕在化し、村人の怒りは沸点に達した。村人総出での直接交渉に乗り出したのだった。

NGO 職員はすぐに村職員 (Village Administration Officer) らを呼び、一行が事務所に到着した。その後、話し合いが始まった。村人は強い口調で村職員に詰め寄り、村の全戸の建て替えを要求し始めた。すると村職員は、予算にも限界があるから全てはできないと言う。

「予算には限りがありますので、20 戸しかできません。被災した村人のリストを作って、こちらへ提出してください。そして、緊急措置として、食べ物と家の損害に応じた財政支援をします…私だって自分のポケットマネーからお金を出しています。キリスト教会からも防水シートを買うための資金を寄付してもらいました。事態は早急に解決できない



写真3 村職員に対して、住宅再建を交渉する村人たち

ので、あまり騒ぎ立てないで下さい。」

村人の強い要求に対して、村職員はなんとかその場をおさめようとしていた。それは、直接交渉の結果、村人が資源を獲得した瞬間であった。最終的に、緊急支援と雨季が終わった後に新しく 20 戸の住居が村に建てられることが約束されたのだった。その後 S 氏は、私が貸した紙とノートを使って、被災者リストを作成していた。

この一連の出来事から、村の草の根のレベルにおいて、行政が提供する資源がいかにか村に分配されるのか、その一端を理解することができた。

「タイチが次に村へ来た時は、新しい家が建っているだろうな。」

交渉を終えた S 氏の表情は、満足感に満ちていた。

引用文献

Skymetweather. 2019. <<https://www.skymetweather.com/content/weather-news-and-analysis/record-rainfall-in-avalanche-region-of-nilgiris-tamil-nadu-76-year-old-record-broken/>> (2019 年 8

月 9 日)

The Indian Express. 2019. <<https://indianexpress.com/article/cities/chennai/nilgiris-floods-heavy-downpour-kills-six-near-avalanche-5905118/>> (2019 年 8 月 14 日)

北タイ、山地の生活とグローバル化のダイナミクス

—少数民族アカとコーヒーとの出会いを経て—

奥野 衣莉香*

驚いた。北タイでのコーヒー栽培がこれほどまでに盛んになっているとは予想していなかった。それも、一般的な食堂などで売られているミルクコーヒーや、甘いブラックコーヒー（ウーリアン）などとは違う、本格的なコーヒーに出会う機会が多いのだ。

チェンマイ市内の街を歩けば、いたるところにカフェがあり、ほとんどの店が内装のデザインに凝っている。また、「北タイ産」「アラビカ 100%」をうたうカフェ、山地の少数民族が作ったコーヒー豆を使用していることを強調するカフェ、世界大会で上位成績をおさめたバリスタがいるというカフェ…商品に対して各々がさまざまなこだわりをもって、中でも私は、北タイのコーヒー栽培の多くが山地の少数民族によってなされている

ということに強い関心を抱いている。それは、現代に生きる彼らがグローバル化の波に大きく影響を受けていることの証左である。

本稿では、アカの人々との出会いで得た経験を中心に、そこにみたグローバル化の影響について述べることとする。

アカの人々との出会い

2019 年 8 月、私はチェンマイを中心に約 5 か月間の滞在を始めた。フィールドワークの最中はアカの人々と接する機会が多かった。きっかけは以下のとおりである。

チェンマイには市内を中心に観光客向けの大きな市場がいくつかあり、その中のひとつにアヌサーン市場がある。そこでは観光客向けの土産品を販売する店が所狭しと並んでい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 彼女の出身はビルマで、カンチャナブリやブーケット、バンコクを経て、チェンマイで自分の店をもつことを考えたという。チェンマイでは 19 年間、店を営業している。常設の比較的大きな店舗である。興味深いことに、商品にアカの手芸品はなく、ほとんどがモンの工芸品だという。



図1 北タイ地図 (●印は中心地)

る。常設の店舗と簡易的な仕切りを設けた小規模な店とがあり、簡易的な仕切りの店の人が多い。店で土産品を販売している人には、少数民族やタイ国外を出身とする人も数多くみられる。ある日、店を回って話を聞いていると、タイミングの良いことに、少数民族のイベントが翌日にあることをアカ出身の女性オーナー店員（65歳）¹⁾ が教えてくれた。

そのイベントはラジオ局の主催で、ホテルの会場の奥まった一角で開催されていた。中では9つの少数民族（モン、リス、アカ、カレン、ダラアン、ミエン、ラフ、ティン、タイヤイ）が、ポスターや伝統衣装、道具を展示したり、グッズの販売をしたりしていた。

アカのブースでは、伝統行事である「ブランコ祭り（Yae Su A-Phaew）」がポスターで紹介されていた。私は妙にそれが気になって、ブースにいるアカの人々にいろいろと尋ねた。そしてとんとん拍子で、ドイ・メーサロンで開催されるブランコ祭りに参加する計画が整った。ブースにいたアカの男性の娘

（満22歳）がチェンライの村ににいるということで、ホームステイさせてもらえることになったのだ。ドイ・メーサロンまでは、その家から車で40分ほどである。

そのイベントでは、30代前半のアカの女性とも出会った。彼女は現在チェンマイで一人暮らしをしている。発音も含め英語が非常に流暢だ。その訳を尋ねると、シンガポールに1年半住んでいた時に自然と身につけたのだという。それから英語力をキープできているのは、シンガポール時代の友人と今でも連絡を取り合っていること、更にはチェンライにあるアカの村の家で観光客向けのゲストハウスを営業しており、その客に欧米人が多いから、ということだった。彼女はそのゲストハウスに客の予約が入った時だけチェンライに戻る。それから続けて言うには、「村ではコーヒー栽培も盛んなの。私もコーヒー栽培をしているから、宿泊客にはアカの伝統的な料理を楽しんでもらうことに加えて、コーヒーの販売もしているのよ。私は一切飲まないけれど。」



写真1 チェンライのコーヒー農園

北タイの麻薬撲滅運動と商品作物コーヒー

北タイのコーヒー栽培は、故プーミポン前国王（ラーマ9世王）がロイヤルプロジェクトの一環としてもたらしたとされる。その背景には山地で盛んに行なわれていたケシ栽培があり、栽培者の多くが山地の少数民族であった。彼らにとって、ケシ栽培は重要な現金収入を得る術となっていたのである。

この状況に対し、1969年、タイ国内では政策としてロイヤルプロジェクトが導入され、1970年代初頭には国際連合による麻薬撲滅キャンペーンが実施された。こうして北タイの山地ではケシに替わってコーヒーやイチゴ、アボカド等の土地に合ったさまざまな商品作物の栽培が開始されたのである [Renard 2019]。だが、当時を知る人々に聞いてみると、当時はコーヒーを収穫してもその後の販路が確立されておらず、安値で買われることが多かったという。そのためコーヒー栽培を途中でやめてしまう者もいた。

しかし、2000年前後から、タイ国内におけるコーヒーの消費量は上がり [Bangkok Post 2019]、北タイ山地におけるコーヒー栽培も盛んになっていった。

しかしこれら商品作物としてのコーヒーは、どうも、山での生活で培われた生産者の飲料文化に大きく入り込んでいる様子はなさそうだ。とはいえ健康ブームも相まって、タイ平地で北タイ産のアラビカ種コーヒーとともに苦いコーヒーが徐々に受け入れられるように、今後変化していく可能性はあるだろう。

現代に開かれる伝統文化—伝統の祭り、インスタ映え、信仰、そしてコーヒー

さて、ここで話をドイ・メーサロンに戻すことにする。私はブランコ祭りに参加するため、上記ホテルでのイベントで出会ったアカの男性の娘 N とともに、2泊3日、寝食を共にした。

2019年のドイ・メーサロンでのブランコ祭りは9月7日、8日の開催だった。その開催日は毎年異なる。大体8月末から9月初旬というのは決まっているが、あとは開催村ごとに日付をずらすため、直前になるまで村長同士で話し合われる。日付をずらすのは、ブランコ祭りがアカの若い男女の出会う場として重要な意味合いをもち、若い男女は、こちらの村からあちらの村へとブランコ祭りを渡り歩くからである。

ブランコ祭り会場のドイ・メーサロンの標高は、1,000メートルを超える。見渡す限りの山々と緑。私は、胸いっぱい新鮮な空気を吸い込んだ。人々はアカの衣装を着て祭りを楽しんでいる。だが、祭りで私が最も驚いたことは、8歳くらいと思われる小さな子どもから大人まで、本格的なカメラを手に写真を撮っていたことである。ここは伝統的な祭り…だが見方を変えると、撮影会の会場のようだった。「あなたはインスタグラムをしている？」会場では何度もこの質問を受けた。なるほど。タイの山地民社会においても、いかにSNSの威力、また、視覚に訴えかける「写真」の影響力が大きいのかを感じさせられた。同時に彼らの現金経済的豊かさも垣間見た気がする。²⁾

翌日日曜日の朝、私はNとNの従妹や友人とともにアカバプティスト（以下ABC）の教会にいた。皆、クリスチャンだ。とはいえ、Nの家では十二支の動物が描かれたアカのカレンダーも飾られているなど、アカの信仰も保持しているようだった。教会内を散歩していると突然、「ほらみて、コーヒーの木よ!」と、教会の一角で育てられているまだ小さなコーヒーの木を指さし見せてくれた。

Nのアルバイト先はアカのコーヒーショップだ。その店員はABCのメンバーだという。後日訪ねてみると、その店はチェンライ市内から車で15分ほどの場所にあった。メニューや内装から、店のコンセプトが「アカ」なのは明らかだ。店は見晴らしの良い高台にあり、周囲には見渡す限りの緑が広がっている。また、更に少し視線を上げると、チェンライの街をも一望できる。カフェの敷地には、大きなハンモックが一面にぶら下がっているオープンエリアがあった。そこでならより一層、自然の中で宙ぶらりんになった気分を存分に味わえる。そしてここでもまた、まるでお決まりのようにカメラを構えた客はしっかりといた。

「コーヒーは飲むの?」

「飲まない。」

その後、滞在から3ヵ月経つ今まで、山地で生活を営む人々に出会うと私はいつもこの質問をしたが、ほとんどの人が飲まないと答える。Nも飲まない。味覚に合わないという。

自分たちではあまり消費しない「コーヒー」



写真2 アカの伝統はお茶



写真3 アカのイベント、チェンライの少数民族学校にて
後世へ伝統文化を伝えることが狙い。

は、現金収入を運んでくる。一方で彼らの自給自足の生活や伝統、風習の形は、確実に現代社会のグローバル化と消費社会の影響を受け、変化している。それでもなお、自らの伝統を何らかの形で現代に合わせ保持する動きは力強くみられる（写真3）。

自文化の保持、発展は決して閉ざされた空間でのみ果たされるものではない。世界の文化がダイナミックに接触し合う現代、生産者―消費者の構図をはじめ、彼らのネットワークは確実に広がっている。また各民族が互いに影響し合い、手工芸品の形態が変化する様

2) 山地で商品作物を栽培する者の間でも、経済的豊かさを得た者とそうでない者の格差が生まれているという。

子もみられる。こうして多くの人が広いネットワークで互に関わり合い生きていくことは、異文化との接触機会といえる。そしてそれは、互いの文化や考え方に影響を与える機会である。そこで新たな文化や考え方を取り込み、培ってきた文化にそれらを反映させることができれば、それは文化の発展ともなるのだ。だがそのためには、自分たちの足で自律的にしっかりと前進するための環境が必然

である。その環境は、皆で作り上げるものであることを、我々は忘れてはならない。

引用文献

- Bangkok Post. 2019. <<https://www.bangkokpost.com/thailand/special-reports/1631922/wake-up-and-sell-the-coffee>> (2019 年 2 月 20 日)
- Renard, R. 2019. <https://www.unodc.org/documents/alternative-development/Final_Published_version_Mainstreaming_AD.pdf> (2019 年 8 月 19 日)

同じ釜の飯を食う

高村（井上）満衣 *

滞在先の女性教師サラ

「この村の子どもは素行が悪い。うちの子どもたちには外で遊んでほしくない。」そう私に語ったのは、この村の小学校で働いている女性教師サラ¹⁾である。私は 2016 年からタンザニア西部キゴマ州のある村で、現地の小学生を対象に調査を行なってきた。調査をはじめた当初、私はこの村に住むサラの家に滞在させてもらっていた。サラには、4 人の子どもがいる。1 人はすでに高校に上がり寮生活をしているため、同居しているのはキゴマ州出身の夫、義理の母、そして 3 人の子どもである。彼女は 500 km ほど離れた北部

のシニャンガ州出身で、教師として赴任するまでこの村どころかキゴマ州に来たこともなく、親戚もいない。タンザニアの教師が公立学校で働く場合、政府が学校を指定する。そのため、サラのように縁もゆかりもない地に行くことがしばしばある。

私がタンザニアの他の地域の人に「キゴマに行く」というと、よく「ムチャウイ (*mchawwi*) に気をつけろ」と注意された。ムチャウイとは邪術師のことで、キゴマに多いといわれている。調査村の人たち自身にも、私の調査している小学校に、夜になるとムチャウイたちが集まるので、絶対に行つて

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 以下、出てくる教師の名前はすべて仮名である。

はならないといわれたくらいだ。そのようなわけで、サラもキゴマに赴任が決まると、親戚中から反対をうけたそうだ。しかし、一度赴任校が決まると変更の希望は通らない。彼女は自分の仕事を全うするため、家族の反対を押し切ってキゴマに来たのだった。

ヤシ油が食べられない教師

小学校には、給食の時間がなく、多くの子どもたちは終業時間に当たる 14 時半以降に一日の初めての食事をする。一方、教師には、午前 10 時前後にママチャイ (*mama chai*) と呼ばれる女性が朝ご飯を売りにくる。飲み物に関しては教師がお金を出しあって自分たちでチャイ (お茶) を淹れるが、食べ物は各自持参するか、ママチャイから購入する。ママチャイが料理するものの中にマハラグウェ (*maharagwe*) という豆のシチューがある (写真 1)。タンザニアではよく食べられる料理であるが、地域によって違いがあり、タンザニア沿岸部ではココナッツミルクを加える。一方、キゴマではヤシ油を使う。都市に出て「ヤシ油が恋しい」といっている

人はキゴマ州出身だと分かってしまうといわれるほどの郷土食材である。ヤシ油は鮮やかなオレンジ色をしているため、使用した料理は色で分かるうえ、独特な味と香りがある (写真 2)。

ある日、職員室で教師とともにママチャイの持ってきた朝ごはんを食べていると、サラにヤシ油のマハラグウェを勧められた。彼女から料理ポットを受け取ると、女性教師マリアに止められた。「マイには、こっちのポットのマハラグウェの方がいいよ」と彼女は手元にあった別のポットを渡した。ママチャイが作るマハラグウェには、ヤシ油を使ったものとヒマワリ油を使ったものの 2 種類あり、マリアが勧めたのはヒマワリ油のものであった。どちらでもいいと答えると、マリアは「ヤシ油は食べられないわ。匂いがきついし、私には味が合わないわ。ヤシ油が食べられるなんて、マイはキゴマの人ね」と笑いながらいった。マリアのように、ヤシ油が食べられない教師の要望で、ママチャイは 2 種類を作るようになったようだ。

マリアは北部のアリューシャ州出身で、2



写真 1 マハラグウェとご飯



写真 2 アブラヤシを熱してヤシ油を作る

年前までムワンザ州の学校に勤務していた。しかし、夫の仕事の都合でキゴマ州に移ってきたばかりであった。彼女は、キゴマの町から通える範囲内で勤務するため、自分の学校と勤務地を交換してくれる教師を探したとのことだった。キゴマに慣れていない彼女は、ヤシ油を全く食べることはできない。彼女のみならず、キゴマで長年働いている男性教師カッシームも、「20 年以上経っても、ヤシ油の香りは苦手だ」という。調査校の教師は他の地域出身者が半数以上を占めている。その土地の食べ物に慣れていない教師は多い。教師は数人を除き、学校がある村には住まず、町から通っているため、地域の人と交流することも少ない。マリアは、「この村の子どもは振る舞いが悪い。自分の出身地では、彼ら彼女らのような行動は親が許さない。だけど、この親は全く子どもたちを気にしない。子どもたちを叱ることがない。教師にしつけないで任しているのよ」と、私によく愚痴をこぼしていた。子どもたちについての話が、最後は村の人々への批判になることも多かった。

同じ釜の飯を食う

一方、サラは学校がある村に住む。この村の学校に赴任した際、キゴマの町に住む選択もできたが、彼女は学校がある村に住むことを選んだ。彼女が不便な村を選んだ理由は、学校からの距離であった。「どんなに便利でも、学校から遠いと意味がない。朝早く起きるなんていやよ。近くに越したことはないわ」と彼女は語った。「あの市場の上のところに住んでいたの。隣のおばあさんがよく

世話をしてくれたわ。ヤシ油の料理も彼女に作ってもらっていたのよ。最初は苦手だったけど、だんだん慣れていったわ。私にとってのキゴマのママよ。」彼女の口から好意的な村の人の話を聞いたのは初めてだった。「ママは、この村での暮らし方を教えてくれたわ。彼女がいなければ、私はここにはいないわね」、「ヤシ油で料理をするようになって、私はキゴマの人になったと言われたわ」と彼女は優しく笑った。キゴマ州出身の夫との結婚がきっかけで、ヤシ油の料理を作り、食べるようになったのかと思っていたのだが、そうではなく、この「キゴマのママ」との出会いがきっかけであった。知り合いのいない土地でひとり村に入り、村の人たちと同じヤシ油の料理を食べ、一緒に暮らしはじめた。彼女のこの村での一人暮らしの思い出が優しい表情を生み出したようだった。

しかしサラはいまだに、自分の子どもたちが近所の子どもと遊ぶことをよく思っていない。彼女自身、この村で密に交流しているのは、教会関係の人々のみである。他の教師と同様、この村の子ども、そして大人たちへの愚痴も多い。私にも、他の家で食事することを「病気になるかもしれない」といって止めたりする。ムチャウイの存在を信じている彼女は「呪いをかけられるから危ない」ともいって、彼女の家で食事するように勧める。また、休日は家で過ごすようにいう。彼女の眼にうつるこの村にどのような変化があったのだろうか。「キゴマの人になった」といわれた彼女は、それでもこの村を悪くいふ。そこには簡単に割り切ることはできない

感情の交錯がみえる。

私も彼女のようにひとり、この村に入って食事をし、自分の眼でこの村を見てきた。彼女は私を止めたけれど、私はその後、この村の小学生の家に移り住むことにした。同じ鍋のヤシ油の料理を食べながら、私はこれからこの村の人たちに、どのように溶け込んでいくのだろうか（写真3）。



写真3 滞在先でご飯を食べる

タイにおける大学での仏教教育

泉 向日葵*

2019年1月1日、私はタイ北部にあるチェンマイ県で新しい年を迎えた。近年の私の年越しは、ごく一般的で定例化していた。31日夜に年末番組を深夜まで鑑賞し、年が明けた1日はコタツの中で年始番組を鑑賞する。そうして迎える新年を数年経験してきたが、今回はこれまでの人生で最も印象深い年の始まりとなった。2019年最初の日、私は友人家族に連れられある場所に向かっていた。

タイの宗教

研究対象国の宗教が何であるか。これは研究内容に関係なく存知すべき情報のひとつで

ある。タイにおいては国民の9割以上が仏教徒であり、国王も仏教徒でなければならぬことが憲法に定められているほどである[日本タイ学会 2009: 24]。タイに滞在していると、あらゆる機会に仏教国であることを痛感する。たとえば、首都バンコクの高架鉄道（BTS）の優先座席の表示には、妊婦や老人同様に僧侶が対象となっている。また街を歩けば、至るところにワット（寺院）が建立されており、その数には驚かされる。では国民の大半が仏教徒であるタイでの仏教実践はいかなるものか。

そもそもタイの上座仏教は二重構造をもつとされる。ひとつは、特権的な出家者のみに

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

救いを約束する理知の宗教であり、ブッタの教えを実践する修行者たちの集団の宗教である。もう一方は、出家者に帰依する民衆の宗教である [石井 1991: 128]。本稿では後者に着目し、民衆の宗教実践について掘り下げることとする。

功德（ブン）を積む（タン）

タイの仏教観の支柱となる基本思想のひとつに、「人間はすべてある状態のあいだに行なった善行と悪行とのいわばバランスシートをもっているのであって、その生存の状態が終了したあと、つまり死後の運命は、その直前の帳尻によって決定される」という考え方があり [石井 1991: 108-109]。この思想では、善行の結果として得られる功德（ブン）が人生を左右する。タイの民衆は、「ブン」の大きさを現世における幸福の度合の相関として捉えている。たとえば、金持ちや地位の高い人を褒めるのに、あの人は「ミー・ブン」（ブンをもっている）と表現する。「ブン」をもっているのが、今の幸福な状況がある、との解釈だ。多くの「ブン」があれば、現世で幸福を獲得し、「ブン」が少なければ不幸になる。それがタイの民衆の考え方である [石井 1991: 114]。「ブン」に対する民衆の思考が理解できたところで、新たな疑問が湧き上がる。どのように「ブン」を生み出すのか。幸福をもたらす行ないがあるのならば、実践したいのが私を含めた人間の正直な気持ちであろう。

「ブン」とは神から与えられるものではなく、みずから生み出すものであるとされる。

そしてその「ブン」を生み出す行為を「タンブン」という [石井 1991: 116]。「タンブン」の中でも最上とされるのが、ワット（寺院）の建立であるが、民衆が比較的安易に行なうことができるものも多い。今回の渡航でのチェンマイ県の友人宅での滞在では、思いもよらず新年最初の「タンブン」を経験することとなった。

元旦のビンタパート（托鉢）

1月1日の朝から私が向かっていたのは、ワット ター マイ イという寺院である。朝7時前という比較的早い時間に到着したせいか、人はまばらであった。到着後しばらくすると僧侶による法話が始まり、それが終わり托鉢の時間になると、到着時の静寂がうそのように周囲は民衆で溢れかえった（写真1）。8時頃には民衆は寺院近くの橋に整列し、鉢を抱えた僧侶がその列の横を通り過ぎていく。僧侶の持つ鉢には、民衆からの供品が次々と入れられる。鉢が供品で溢れかえるたびに、僧侶の周辺を歩く在家の補助者によりビニール袋に供品が移し替えられる。こういったように数名の僧侶が私の前を通り過ぎていった。

写真からも分かるよう、この日多くの人々が早朝から集まった。その人の数から、いかに民衆が「タンブン」の価値を評価し、僧侶に帰依しているかが理解できる。彼らの「タンブン」への情熱は、供品の準備段階からも感じられた。31日の夕方、友人宅では1日の托鉢に備え、供品を準備していた。供品に特に決まりはないようであったが、友人家族



写真1 橋の上に溢れかえる人々

の場合は、封筒にいった現金、缶ミルク、粉末飲料、米であった。粉末飲料や米は小分けにし、それらを1セットずつ袋にいれ、最後に袋を紐でしばった。通常はこれで完成であろう。しかし友人家族はその後、袋をしばった紐をナイフを使用し丁寧にカールさせていた（写真2）。この手間にこそ、彼らの「タンブン」に対する情熱、信頼、仏教への尊敬を読み取れる気がした。

自然に許容される宗教教育

思い返せば、私が「タンブン」の思想や方法を知ったのは2015年である。当時首都バンコクにあるチュラロンコン大学に留学していた私は、タイ文化に関する授業を履修していた。その授業の一環で、「タンブン」を授業外で行ない、活動内容をプレゼンテーションする課題が出された。私と友人らはバンコクにあるワット タートンという寺院を訪れ、お手洗いの清掃を行なった（写真3）。

国立大学での仏教教育、甚だ不自然である。国民の9割が仏教徒とはいえ、大学在籍者全員が仏教徒とは限らない。しかし大学



写真2 2018年12月31日に用意した托鉢用の供品



写真3 タンブンとしての寺院清掃

では平然と仏教について語られ、仏教観に基づく行為が課題として課せられる。日本では考えられない。というのも日本国憲法では「信教の自由は、何人に対してもこれを保障する」ことを前提とし、「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教活動もしてはならない」という政教分離の原則〔辰村 1983: 18〕が設けられているからである。したがって宗教に関する教育は違憲であり、日本人が不自然に感じるのは当たり前である。大学での仏教教育は日本では不自然とされるが、タイでは学生が疑問を抱くことなく、仏教教育

が遂行されていた。現地に滞在すると、日本との相違を感じる場面に多々遭遇する。本稿での私の経験はその一片にすぎず、異郷でのさまざまな新発見こそがフィールドワークの醍醐味である。

引用文献

- 石井米雄. 1991. 『タイ仏教入門』めこん.
日本タイ学会. 2009. 『タイ辞典』めこん.
辰村吉康. 1983. 「日本国憲法上の政教分離原則について一箕面市忠魂碑移設訴訟判決を素材として」『岐阜大学教養部研究報告』19: 17-37.

A Tale of Three Feral Dogs in the Annapurna Base Camp Trail, Nepal

Sese MA*

Annapurna Base Camp Trail

The Annapurna Conservation Area is the largest protected area in the Annapurna mountain range of the Himalayas. It covers 7,629 sq mi and ranges in altitude from 790 m to 8,091 m. Its rich topography results in a complex landscape. Inside the conservation area, the Annapurna Base Camp Trail represents one of the most popular trekking routes in Nepal. It takes 7-12 days to complete, with the Annapurna Base Camp (4,130 m) as the final destination. The trail is spectacularly regarded as it is surrounded by four major Himalayan peaks, namely Annapurna I (8,091 m), Annapurna South (7,219 m), Machapuchare (6,993 m) and Hiunchuli (6,441 m). It is relatively easy to

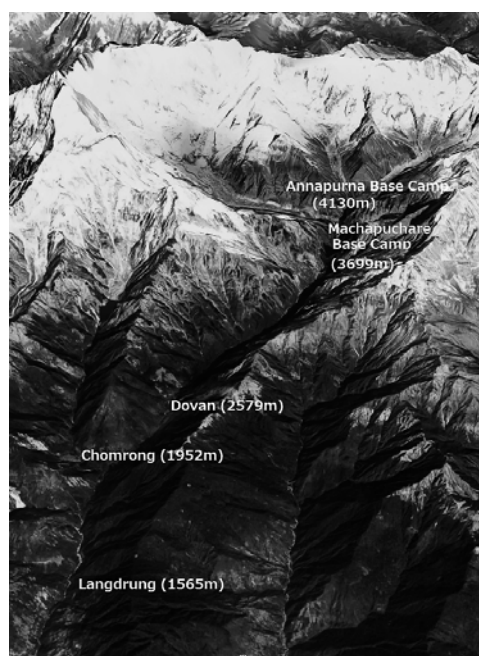


Fig. 1. Annapurna Base Camp Trail

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

reach when compared with other camps with a similar proximity to the glacier. Therefore, both new and experienced trekkers as well as photographers frequently choose this route.

Depending on the amount of time available to the trekker and the scenery one wants to see, there are a range of routes to be taken. I undertook the trail in October 2018 at the very end of my fieldwork in India and Nepal. I chose the fastest route, which took seven days to complete, three days to climb up and four days to come down. The route went from the city of Pokhara to the town of Langdrung, from Langdrung to Chomrong, Chomrong to Dovan, and finally the Annapurna Base Camp passing Machapuchare Base Camp along the way. The route is planned in order to reduce the risk of high altitude sickness, as symptoms can occur if one increases their elevation by 300 m or more within a day.

I went to these mountains in search of feral dogs, to learn about animals that come in and out of man-made spaces. Unlike the city stray dogs that form packs between narrow living compounds, dogs from the hills are not targeted by spaying and neutering campaigns funded by the government and international NGOs due to their sparsity and high mobility. Perhaps for the same reasons, they are not mentioned in stray dog studies conducted in Nepal, which are concerned primarily with public health issues. A friend from India first

brought the existence of mountain dogs to my attention, as twenty years prior on a hiking trip in Nepal she had heard tales of mountain dogs guiding lost trekkers. Today, the trail is highly commercialized and crowded with many signs and camps, populated by hundreds of trekkers, guides, and porters on their way to their destinations. As such, it is unlikely that dogs are still living in this region, and if they are, it is doubtful whether they are willing to be seen?

However, on the trail from Dovan to Annapurna Base Camp, I encountered approximately 15 feral dogs. Most of them were solitary, while some appeared in pairs and always looked identical to each other. They were always on the move, regardless of time of day. For food, they hunt sheep or smaller animals, such as porcupines. Some of them receive food from the trekkers if they happen to pass a camp at mealtime. However, this is always initiated by trekkers who offer food. These feral dogs do not seem to see humans as a potential food source, as is often assumed in the case of city dogs. No attempts to interact with humans have been observed from the dog's side in either camps or on trails. From my observations of these 15 feral dogs, I would like to share stories with you about three individuals.

The Dog I Encountered in Machapuchare Base Camp

Located at an altitude of 3,699 m above sea level, is Machapuchare Base Camp, which is located on a riverbed in the windy valley. In order to reach the Annapurna Base Camp, it is necessary to pass by Machapuchare Base Camp, as such most people use it as a resting spot during a day with a six hour long climb up a steep trail. Mornings on the trail are generally characterized by clear skies, however, the weather frequently becomes foggy and rainy, accompanied by a strong, cold wind in the late afternoon. As a result, most trekkers grab a quick bite, and often leave their food unfinished. This may be why I met a female dog next to a table at this camp.

I was surprised when the dog approached me and started to eat the omelet off my plate, as no previous dog had done this on the trek. All feral dogs appeared self-efficient and uninterested in human food. Despite this, she kept eating until the camp owner came and attempted to shove her away. She showed no signs of concern and did not relent, until after several attempts the owner gave up. I spent some time resting on the bench after returning the plates, and after 10 minutes, I saw the owner give the dog all the collected leftovers while washing the dishes outside. His eyes were full of affection—I felt that he shoved her away not because he was annoyed by her, but because he didn't want the tourist to think



Photo 1. Machapuchare Base Camp



Photo 2. A Big Herd of Sheep Grazing on the Trail between Annapurna Base Camp and Machapuchare Base Camp

of her or the camp badly.

Upon seeing me watching them, the owner gently told me that she was pregnant, and he thought that was why she had recently come to the camp. I expect that it is difficult for pregnant dogs to compete with other dogs in terms of hunting, and she came to the camp

in an attempt to secure food only during pregnancy. The owner said she would most likely leave after the delivery of her pups. It was touching to see this bond between a feral dog and a human, with no attempt to claim ownership over one another.

Two Dogs on the Trail between Annapurna Base Camp and Machapuchare Base Camp

After I left Machapuchare Base Camp, I soon encountered a big herd of sheep grazing right next to the hill. There were approximately a hundred sheep with no people to mind them. Shortly after, two small black dogs which I had previously encountered on the trail from Bagar to the Machapuchare Base Camp, caught up to and ran into the herd. A small number of the sheep closest to the dogs were disturbed but did not attempt to run away. I did not realize what they were doing until they started focusing on four or five sheep in an attempt to split them from the herd. The dogs kept preventing the sheep from moving in the direction of the herd, until eventually three sheep were separated from the herd, surprisingly the herd made no attempt to defend or rescue the separated sheep.

Once the three sheep were driven a small distance from the herd, the two dogs (which were smaller than the sheep) started chasing them downhill. In several seconds, the slowest sheep was singled out and one dog began biting one of the sheep's back legs. The

sheep was not slowed by this attack and still ran at great speed, during this time the other dog caught up and began running abreast of the sheep. Just before leaving my sight I saw the other dog bite into the neck of the still running sheep.

All the trekkers around me were shocked by the scene and no one dared to go back down to check the sheep, as we all needed to arrive at Annapurna Base Camp before 4 p.m. when it became dark and freezing. The large herd, seemed to be relatively undisturbed and stayed in the same area, with no further attempts to run away or relocate. Further I could not see any individual sheep acting anxious. This made me question if this was a regular occurrence for the herd to experience. Was the herd aware that the slowest and weakest member of their herd was likely killed that day? I arrived at the base camp just before it was completely dark, filled with a mix of emotions. There, I met trekkers from Korea who had witnessed what had occurred beyond my sightline—the sheep had



Photo 3. Three Dogs on the Trail. Among them, the two black dogs later hunted the sheep.

eventually fallen and despite attempts by a trekker to disturb the dogs with her trekking pole, the two dogs brought down the sheep and begin feeding just next to the trail.

I suppose this is a skill necessary to survive at altitudes over 3,000 m above sea level. There is very little food waste by humans, and meat consumption is not allowed out of respect to the mountain goddess. This was the first hunt I witnessed in which the prey was bigger than both dogs. I wonder, how do all the similarly sized solitary dogs survive at this altitude, do they depend only on smaller animals?

Reflection: What can We Learn from Their Lives?

After reading James Scott's *The Art of Not Being Governed*, I realized that mountain dogs in the Himalayas could be seen as beings which live in the frontiers [Scott 2009]. Their small groups and great mobility made it difficult for mass culling or neutering

campaigns to target them, furthermore their dispersal guarantees that they don't pose a threat to tourism and anthropogenic projects. The absence of empirical knowledge relating to them might correspond to the ways in which the state rarely bothers to control dissidents living in the peripheries. However, with the continuing development projects in Nepal that reconstitute borders and alter opportunities for movements, the presence of these dogs might become problematic. This is the primary reason why I am hesitant regarding the use of GPS tracking collars or other improved technologies of surveillance for the study of these dogs. I wonder what would represent an ethical and practical way to get to know them within my own physical limitations, while respecting them, and I continue to struggle with this methodology.

Reference

Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland South Asia*. Yale University press.

宝石と洪水の街で生きる

土 田 亮 *

「リオ，この街では宝石と洪水は密接に関わっているんだよ」

これは筆者の研究対象地であるスリランカで，調査に同行してくれた行政職員が語った言葉である．私はこの言葉にハッとした．なぜそのように感じたのか？ 研究対象地であるスリランカのある地域を中心に，災害研究と地域研究のレンズを通して述べていきたい．

スリランカと洪水災害

スリランカ民主社会主義国（以下スリランカと称す）は都市部で近年，急激な人口集中，ダムや堤防，警報などのインフラの未整備，また，違法ではないが，人口増加によりこれまで住まなかった洪水氾濫域に人々が居を構えるようになった．加えて，スリランカには4つのモンスーン期があり，とりわけ「ヤラ（yala）」と呼ばれる5月～9月の南西モンスーン期では，南西から吹く風によって運ばれる水を豊富に含んだ雲がスリランカ中央の山岳地帯に遮られることで島の南西部に多量の雨をもたらす [Ministry of National Policy and Economic Affairs and Ministry of Disaster Management 2017]．これらのことで，スリランカの都市部では，災害発生リス

クのある地域に住んでいるために人や地域の脆弱性が高まったり，豪雨による洪水や土砂災害により，人口・財産が危機にさらされたりしている．

2017年5月末には南西モンスーンがスリランカ全土に大雨と強い風をもたらし，2日間の降水量は600 mmにまで達した．この豪雨はスリランカ25県のうち15県で急激な洪水や地滑りを引き起こし，約90万人の被災者を生み出した．とりわけ被害が大きかったラトゥナプラ県ではおよそ6万世帯（約24万人）が被災し，住宅約800軒が全壊，約1万軒が一部損壊したことが報告されている [Ministry of National Policy and Economic Affairs and Ministry of Disaster Management 2017]．この豪雨洪水災害により，スリランカは2017年に最も気候変動の影響を受けた国第2位に位置付けられた [Eckstein *et al.* 2018]．

筆者の調査対象地であるラトゥナプラ県は，スリランカの主要都市コロombo市から東に約90 kmに位置するサバラガムワ（Sabaragamuwa）州の州都である．その中心都市であるラトゥナプラ市は，カル川（Kalu Ganga）上流にあり，四方の山地からの河川が集中する地点に位置している．また，カル

* 京都大学大学院総合生存学館

川の下流低平部と上流盆地の境界地点は流路幅約 50 m のボトルネックとなっている。これらの地理的要因がラトゥナプラ市での洪水被害を助長する一因になっている [小松ほか 2005]。

ラトゥナプラ市と周縁部の主要産業は米や野菜などの農業、ゴムやココヤシなどのプランテーション農業であり、総労働人口のうち、4 分の 1 が公務員で、残りは民間企業や農業セクターで働いていたり、宝石産業や飲食業などの自営業であったりする。多くの世帯でもともと収入が安定していないため、洪水災害によって生計が成り立たなくなるリスクがある [UN Habitat Sri Lanka 2015]。

ラトゥナプラ市街地の様子が写真 1 である。幹線道路に沿ってバスターミナルやスーパーマーケット、路上市場、市役所、図書館、警察署、飲食店、診療所など主要な機能をもった施設がある。街の中心を流れるカル川周辺には持ち家や個人経営の店舗が分散している。川に架かる橋から見渡すと、川には堤防は敷かれておらず、住宅が稠密している (写真 2)。これらの住宅は極めて洪水リスク



写真 1 ラトゥナプラ市街地の様子



写真 2 カル川にかかる橋から見える風景

の高い場所にあるわけだが、必ずしもカーストなどの社会階層によって配置されているわけではなく、代々住んでいる者もいれば、わざわざ土地を新しく購入して家を建てた世帯もある。

宝石と洪水が映し出す現実

ここで冒頭の言葉に戻りたい。筆者が 2018 年 3 月中旬に行なった現地調査の際に、ツテを辿って同市で宝石を発掘する人たちのもとへ案内された時のことである。以下では、ラトゥナプラ市の中心からおおよそ 10 km 離れた、カル川の支流のそばにある村での出来事についてのフィールドノートの記録である。

2018 年 3 月 23 日 (金)

よく晴れた日の午後 2 時を過ぎた頃だった。私は案内役をしてくれた 30 歳代の男性行政職員のバイクに乗せてもらい、舗装されていない道を鞭打ちになりそうな衝撃に耐えながら進むと、1 軒の小屋にたどり着いた。私はバイクから降りて 6 畳ほどの広さの掘っ立て小屋を覗いた。そこには、やせ

細った老人，小太りの中年男性，健康そうな若年男性，そして明るい笑顔の小さな男の子がいた。4人は見知らぬ私に対して，右手を顔の高さほどまで上げて陽気な笑顔とともに挨拶をしてきた。3人の大人は上半身裸で，下は短いパンツを履いているかサロンを巻いている。小屋の中や採掘の現場を見ていいかと聞くと，「カマック ネー（構わない）」と首を支点にして顔を揺らす仕草をした。

小屋の中は，床は土がむき出しの状態で，階段のないロフトがついていた。ロフトの下段は土嚢袋や機具，生活用品を置く荷物置きとして，上段は生活や休憩をする場所のようだ。彼らが生活の拠点にしているこの小屋は，茅葺き屋根とバナナやココヤシの葉で編まれた壁，竹や木の柱と，非常に簡素な作りであった。

その小屋のすぐ隣には宝石を発掘するための小屋があり，そこには垂直下方向に20 m，その底辺から水平に20 mの穴が掘られていた。穴の大きさは成人男性2人が通るのがやっとなくらいである。どのように宝石を見つけるのか中年男性の話を聞いてみたところ以下のようなことだった。まず，大雨で洪水がやってきて川が氾濫する。そうすると上流から原石の混じった土砂が流れ込んで，その土砂が穴に入ってくる。洪水の程度によって2～3日程度で水が引く場合もあれば，1週間も水浸しの時もある。水位がある程度下がった後，エンジンポンプを使って穴の外や近くの川へ排水し，水平の穴のあたりまで排水したら人が入る。穴に入って作業をする人が酸欠にならないように，地上ではポンプ



写真3 宝石を発掘する小屋と人びと

を作動させて穴の中に空気を送る（写真3）。こうして底に溜まっていた土砂を土嚢袋に詰め込んで釣瓶方式で地上に持ち出す。地上では別の人が土嚢袋から一塊の砂を箒に取る。その後，近くの川に移動して箒で細かな砂と小粒の石に篩いかける。箒に残る小粒は文字どおり玉石混淆の状態である。

私は排水と換気を行なうポンプの音に圧倒され，宝石探索の現場を初めて見た高揚感に浸っていた。再びバイクに乗って帰る時，同行してくれた男性職員が発したのが冒頭の言葉である。私は虚を突かれて「それはどういうことなの？」と聞き返した。男性職員がバイクに乗りながら淡々と私に話してくれた。

「彼らみたいな人たちは，決して一攫千金を目指して宝石を見つけるという夢に安易に乗っかっているわけじゃない。皆が好き勝手に穴を掘り出すわけじゃない。彼らは慎重に場所を吟味し，なけなしのお金を払って必要な機械や掘削権を買うのさ。だから，巨額の宝石を見つけ出すまでは買取った土地や穴を放り出すわけにはいかない。時には今日見た三世代の男たちのように，家族一丸となって

リスクな生業に身を投げ出すような人たちもいるよ。とはいえ、必ずしも自分たちの作った穴に原石が流れ込んでくるとは限らない。それに、彼らの行為は違法ではないけれども、洪水は原石をもたらしかもしれないけど同時に自らの命や生活を危うくさせることもあるよね。それでも彼らはどうにか宝石を見つけ出そうと働くのさ。たとえば、市街地の方に置いてきた家族の生活を養うためにね。」

男性職員の話を聞いて、私はこれまで論文や報告書で考えていた災害と人の暮らしとの関わりを、違う角度でみたような気がした。

災害研究と地域研究

「リオ、この街では宝石と洪水は密接に関わっているんだよ」という言葉について考えてみたい。

ラトゥナプラやその周縁の人々にとって、洪水災害は紛れもなく生活の一部である。それはある人にとっては困難や悲しみをもたらすものでもあれば、別の人にとっては生活の糧や生き生きとした喜びをもたらすものでもある。そこで私が住民を過度に逞しい存在として見たり描いたりすることも、不当かつ一方的に搾取される声なき可哀想な存在として感じ取ったり表象したりすることも、おそらく現実を十分に捉えてはいないし、彼ら彼女らが望む描かれ方でもないだろう。フィールドで出会う場面からそこで暮らす人々について何をどのように理解し、それをどのように書くのか。被災地でのフィールドワークとしては、たとえば、清水による被災者の語り

の記録は、非常に精緻に現実を描きながら、それでも強く情緒を揺さぶってくる〔清水 2003〕。筆者もいつかこうしたアプローチでスリランカのことを書いてみたいと思っている。

筆者が何度かスリランカに渡航したこの数年にも、両国では稀にみる大規模な自然災害が立て続けに発生した。直近では日本でも台風 15 号や 19 号が発生し、多くの犠牲者や長い避難生活を余儀なくされる人々を生み出した。その間も筆者は、文献を読んだりデータを分析したりといった大学院生としての日常を過ごしている。調査に行くべきか、分析に徹するべきか悩ましい時期が何度もあった。災害研究に限らず、地域研究も、現地での〈日常〉―〈非日常〉を身体で感じることで、これまでもっていた自分の当たり前やアイデアが崩れることが多い。しかし、長い時間現地に関与しながら〈日常〉―〈非日常〉をつぶさに観察し、考え続けることは重要である。私はこのことを信じて、これからもよりよい災害復興のあり方を被災地・被災者と深く、そして広く関わりながら考えていきたい。

引用文献

英語文献

- Eckstein, D., M.-L. Hutfils and M. Winges. 2018. *Global Climate Risk Index 2019*. Berlin: Germanwatch e.V.
- Ministry of National Policy and Economic Affairs and Ministry of Disaster Management. 2017. *Sri Lanka Rapid Disaster Needs Assessment Flood and Landslides, May 2017*. The Ministry of Disaster Management and Ministry of National Policy and Economic Affairs in

collaboration with the United Nations, World Bank and European Union.

UN Habitat Sri Lanka. 2015. *Ratnapura, Disaster Risk Reduction and Preparedness Plan: Towards a Sustainable and Resilient City*. Disaster Resilient City Development Strategies for Sri Lankan Cities.

日本語文献

清水 展. 2003. 『噴火のこだまーピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』九州大学出版会.

小松利光・田中 仁・戸田圭一・清水康行・藤田正治・石野和男・風間 聡・牛山素行・勝濱良博・Srikantha Herath・Bandara Nawarathna. 2005. 「2003 年 5 月スリランカ南西部水害調査報告」『水工学論文集』49: 433-438.